
あなた

からたちみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなた

【Zコード】

Z2013D

【作者名】

からたちみかん

【あらすじ】

風邪を引いて寝込んでいた智也を見舞ったのは同じ工場で働く柳
だつた。柳に言われるまま病院へ行く智也。熱のある体でぼんや
りと思い出すのは密かに想いを寄せる少女、響のことだった。短期
留学でカナダに行つた響。帰つてきたら告白しようとした心に誓つ智也
であった。そしてその晩、智也は響の夢を見る……。

工場の長く急な階段を児玉智也は上つてゆく。突き当たりに見える窓から柔らかな日差しが降り注いでいた。あまりの眩しさに智也は思わず目を細める。手すりにつかまりながら階段を上つて行く。息が苦しかった。節々が痛んで体が重い。その場に崩れ落ちそうになつて智也は手すりにしがみついた。風邪を引いたのだろうか？

今朝から体がだるい。

階段を上りきつて一階の倉庫へたどり着くと息が切れていった。普段ならこんなことはないのに。肩で激しく息をする。

「どうした、児玉。顔色悪いぞ」

そんな智也の様子を見て上司が声をかけた。

「何か、風邪引いたみたいで」

「お前もか。インフルエンザ流行つているからな。気をつけろよ」「すみません」

上司の言葉の裏には「休むな」という意味が込められている。一月末の時期。風邪で欠勤する者が増えていた。これ以上欠勤者が増えれば工場での作業に支障をきたすのはわかっている。智也はだるい体を引きずるよう自分配置に向かつた。

早く風邪を治そうと早めに就寝したにもかかわらず翌朝、目が覚めると更に悪化していた。頭は割れるばかりに痛い。喉も掠れて声が出ない。何よりも体の節々が痛くて動けなかつた。智也は仕事を休む連絡を入れてそのまま布団もぐりこんだ。

工場の寮の階段を上がつてくる人の足音で目が覚めた。喧しい足音は智也の部屋に近づいてくる。

まさか、と、思つた瞬間叩きつけるような音が響いた。智也が起き上がるよりも早く部屋のドアが乱暴に開く。

「生きてるか？」

その声にやつぱり、と、思いながら智也は起き上がった。

「生きてるよ。病人なんだからもつと静かにしてくれ」

「ああ、悪いな。それより空氣濁んでるぞ。換氣しないと駄目だろ

う」

部屋に入り込んできたのは職場の同僚、寒河江柳さがえ りょうだった。柳は悪気なく言うとカーテンと窓を開けた。眩しい光と冷たい空氣が部屋の中に入り込んでくる。

「寒いって」

「ちゃんと換氣しろ」

「お前、何しに来たんだよ」

「様子見にきてやつたんじゃないか」

ぐだらない会話の攻防が続く。

「どうせ何も喰つてないんだろ？ お粥でも作つてやるうつと思つてわざわざ昼休み抜けてきてやつたんだから。感謝しろ。台所借りるからな」

そう言ひと柳は台所へと消えて行く。強引な言い方ではあるが智也を気づかつての行動だった。

「寝てろよ」

台所から柳の声が響く。智也は言われた通り布団の上に横になつた。寮での独り暮らしは氣楽ではあるもののこんなときは心細くなる。柳の気づかいが恥ずかしながら智也は嬉しかつた。

「出来たぞ」

十分としないうちに柳はお粥を作つて持つてきた。起き上がりて目の前に置かれたお盆の上に乗つていたのは卵粥だ。柳の料理の手際良さに智也は感心する。実家が元定食屋なだけあって柳は料理が上手い。

柳は高校中退後、実家の定食屋を手伝つていた。が、不況の煽り

をうけて店を閉める事になり、今働いている工場に就職したと言つていた。

高校中退なのは智也も同じだ。何の目的で学校に行つて勉強しているのかわからなくなつて智也は高校を中退した。家に引きこもつて。何もしないで。そんなとき自分を救つてくれたのは父親だった。学校に行かないのなら働けと強引にこの工場へと連れてこられた。嫌々ながらも住み込みで働きはじめた工場ではあつたけれど、結果的にはよかつた。毎日追われるように働くことで無氣力だったことをいつしか忘れていた。

柳とは性格も正反対なのに気が合つた。今までどれだけのことを柳と語り合つただろう。

親友と呼べる存在に出会えたことが何よりも智也にとってはアガたかった。

「ちゃんと喰えよ

「うん」

素直にありがとうとは言えず智也は頷く。智也が素直じやないことは柳も承知している。

柳は智也の横に腰を降ろした。智也が食べるのをじつと見ている。食欲はなかつたけれど柳が横で見ているので食べないわけにはいかない。智也は添えられた蓮華を手に取つた。

「病院は行つたのか？」

「……病院は嫌だ」

智也は小さな声で答えた。病院は嫌いだ。面倒くさいし出来ることなら行きたくない。

「行け」

柳はせりじと命令形で言い切つた。智也は返す言葉も見つからず黙々と卵粥を食べ続ける。

「明後日には響も帰つて来るんだから、病院に行つてこい」呆れたように柳は言った。柳が口に出した名前に智也の蓮華を持つていた手が止まる。

彼女の屈託のない笑顔が浮かんだ。

「……響には内緒にしてくれ」

「何を？」

「風邪引いた」と……

歯切れ悪く智也は言つた。とたんに柳は大声を上げて笑い出した。

「笑うな！」

「『めん、『めん』

謝りながら柳は腹を抱えて笑っていた。本調子であつたらぶつ飛ばしてやりたいところだ。

「言われたくなかったら病院に行け。いいな」

言つと柳は立ち上がった。

「もう行くのか？」

「俺が昼飯喰う時間がなくなる。お粥多めに作つておいたからちやんと喰えよ。じゃあな」

柳は背を向け去つて行く。

「サンキューな

精一杯の感謝の言葉。

「病院行けよ」

柳は振り返ることなく、手をひらひら振りながら部屋を出て行った。

はじめて響に会つたのは柳の部屋だった。

その日、智也は休日で暇を持て余していた。柳も休みだったはずだ。自分以上に出無精な柳なら部屋にいるだろう。そう思つて智也は同じ寮に棲んでいる柳の部屋を訪ねた。

「柳いるか」

部屋のドアをノックして呼びかける。

「開いてるからいいぞ」

部屋の中から柳の声が聞こえた。智也は部屋のドアを開いて部屋

に入る。が、智也は思わず立ち止まつてしまつ。柳の部屋には見知らぬ女の子がいた。

「どうしたんだよ、上がつてこいよ」

硬直したままの智也に柳は首を傾げた。

「あ、いや。もしかして邪魔したか？」

「は？ 何言つてんだ？」

「いや、彼女が来てるのに邪魔かな、と……」

気まずいと思って智也が言つたとたん柳は吹き出した。隣にいた女の子も苦笑いを浮かべている。

「違う、違う。そんなんじゃないって。ともかく上がりよ」

大声で笑いながら柳は言つた。どうやら柳の彼女ではないらしい。

「ほんちわ」

智也が部屋に上ると彼女はにっこりと微笑む。小柄で人懐っこい笑顔。

「……どうも」

人見知りが激しい智也は初対面の人間が苦手だ。緊張してしまう。

「俺の幼なじみで、元力ノの響」

さらりと柳は言つた。

「鈴木響です。いつも柳がお世話をになっています。つていうかそんな過去の汚点いまさら蒸し返さないでよ」

言つて響は柳を小突いた。

「……児玉智也です。俺こそいつも柳には世話をしています」

お互いに自己紹介したものの一人の関係がイマイチ理解できず智也は柳に視線を向けた。

「そんな、困った顔するなよ」

「したくもなるわよ。ごめんね。気の利かない男で。アンタがわけわかんないこと言つから困つてるんでしよう」

「わけわかんないことって、事実だろうが。実際付き合つてたんだし」

「だから昔の話でしょう」

「ムキになるなよ。何だ？　お前また失恋したのか？」

「つるさい！」

柳と響の会話に立ち入ることも出来ず、智也は仲がいいなと思いながら眺めていた。

それが響との出会いだった。

柳に言われ仕方なく智也は病院に行くことにした。病院までの道のりをだらだらと歩いて行く。外の日差しはだいぶ暖かくなってきた。まさしく小春日和だ。

病院にたどりつくとまだ昼休み中だった。

待合室は閑散としている。午後の診察がはじまるまで三十分以上あつた。保険書を受付のボックスに入れる。智也は隅っこを選んで腰を降ろした。

だるい体を椅子に預け目を閉じる。

熱のせいかふわふわと浮揚しているような気がした。まるで水中を漂つているような。懐かしいような感覚に智也は、響と一緒に行つた水族館のことを思い出した。

響と知り合つてから三人で遊ぶようになつた。どこに行くにも一緒にで楽しかつた。

「ねえ、みんなで水族館行こよ」

いつものように三人で食事していたとき突然響が切り出した。

「水族館？」

「行こうよ、ね？」

「俺はめんどくさいからバス。一人で行けばいいじゃん」

出不精の柳の一言で水族館は響と二人で行くことになつた。後々考えてみれば柳なりに気をつかっていたのかもしれない。

冬のはじめの暖かな日。はじめて響と一人で出かけた。水族館で

はしゃぐ響の姿は見ていて飽きない。

ぐるぐる廻る、あなたはまるで万華鏡。光の世界にいるあなたを俺はいつも眩しく見つめていた。

いつの頃からか智也は響に惹かれていた。こんなチャンスはない。今日こそは告白しよう、と、智也は胸に秘めていた。

平日の水族館は閑散として人はまばらだった。薄暗い館内の中央に筒型の水槽が置かれている。その中を無数の海月が漂っていた。ふわふわと漂う海月の姿は幻想的だ。響は漂う海月を一心に見つめていた。

「海月、好きなの？」

「うん、好き。きれいだよね。海月って飼育難しいって聞いたんだけどこりゃって水族館で見るのははじめて」

嬉しそうに言つて響は水槽を見つめ目を輝かせていた。智也は今こそ、と、意を決した。

「あのさ、響……」

「あたし今度留学することになったの」

智也の言葉を遮つて響は口にした。突然のことでの智也は言いかけていた言葉を飲み込んだ。

「留学つていっても三ヶ月の短期留学なんだけど。しばらく会えなくなるね」

言つて響は少し顔を曇らせた。寂しそうな笑顔。

「あ、ごめん。あたしまた何か遮っちゃった？」

はつと氣づいて慌てたように響は言つた。響に言葉を遮られるのはいつものことだ。自分が喋ることで精一杯で響は人の話を聞いていないことがあった。

「いや、何でもない。それにしてもずいぶん急だな」

前々から留学をしたいと言つていた響の顔を思い出す。将来の夢を語つっている時の響の顔は輝いていた。

想いを押し込めて智也は笑みを浮かべた。

「がんばって勉強してこいよ」

「うん、ありがとう」「う

屈託のない笑顔で響は笑う。

一週間後、響はカナダへ留学するため日本を旅立つた。柳と一人で響を空港まで見送りに行つた。まっさらな青空の下、離陸してゆく飛行機を見上げた。

「いつちまつたな

柳の咳きに智也は頷く。結局、智也は響に想いを伝えることが出来なかつた。今、告白をしたら響の重荷になつてしまひやうで怖かつた。いや、逃げただけなのかもしれない。

「お前、響のこと好きだろ？」「

突然の柳の言葉に智也の胸が高鳴つた。答えに詰まつて智也は顔をそむける。図星すぎるほど図星で智也は言い返せなかつた。

「告白は……その様子じやしてないんだろ？」

柳は呆れたように智也を見つめていた。

「どうなんだよ？」

「……」

答えない智也に柳はひとつため息をついた。

「響が帰つて来たらちゃんと捕まえておけ。じゃないとあいつ、フラフラしてて危なつかしいからさ」

言つて智也を見つめる柳は優しい顔をしていた。それが響に向かれている優しさなのか、それとも智也に向けられているもののか真意はわからない。きっと両方に向けられた優しさなのだろう。

「うん」

智也は小さく頷いた。響が帰つて来るまで俺も少しは成長なくちゃいけない。智也は心に決めた。

「さて、メシでも喰つて帰るか

柳は踵を返し歩き出す。智也は響が飛び立つていった空をもう一度見上げた。

病院から寮に帰ってきた頃には陽はだいぶ傾いていた。注射を打つてもらつたおかげでいくらか楽になつた。

ともかく早く風邪を治さなくては。眠るのが一番いい。智也は柳の作ってくれたお粥の残りを食べると早々に床についた。

どのくらい眠つただろ？

夜中に田が覚める。ぼんやりとした頭で辺りを見回すと部屋が薄明ることに気づいた。閉めていたはずの窓が開いている。カーテンが風にたなびいて窓の外に白い月が浮かんでいた。きれいな月だ。

「智也」

響の声が聞こえた。ここにいるはずのない響の声だつた。

「どうしたの、智也？ 風邪でも引いたの？」

枕元に響が座つていた。微笑みながら響は心配そうに智也の顔を覗き込む。驚いて智也は起き上がつた。

「響！ どうしてここにいるんだよ」

間の抜けた声で智也が問うと響は笑つていた。

「驚かせようと思つて早く帰つてきたの。びっくりした？ 前に智也の誕生日一緒に祝いしようつて言つたじゃない」
久しぶりに見る響の笑顔だつた。

「今日は智也の誕生日だね」

誕生日なんてすっかり忘れていた。一緒に祝おうと言つてくれた」とやえも。

「……俺、今日誕生日だつたんだ」

「やだ、自分の誕生日も覚えてないの？」

智也は曖昧に頷いた。自分の誕生日なんて忘れていた。あぐく風邪まで引いて寝込んでいたのかと思つと智也は情けなくなる。

「どうしたの？」

「情けなくて。こんな姿、響には見せたくなかつた。ホントに自分で情けなくなる。響が帰つてくるまでもつとちゃんととしてようつと思

つたのに俺、何も出来なかつた……」

帰つてきたら好きだと告げようと思つていたのに。こんな状態で言えるわけがない。

「駄目だよ、寝てなきや。風邪治らないよ」

言つて響は智也の体を無理矢理押し倒して布団に寝かせた。響は智也の額に手を当てる。冷たい手。響の手の冷たさが心地よかつた。

「少し熱あるね」

響は微笑む。

「智也はあたしがいないあいだ寂しかつた？」

問われて智也は素直に寂しかつたと言えなかつた。寂しく会いたくてたまなかつたのに。智也が答えずにはいると響はまるで堰を切つたかのように話しあ始めた。

「あたし、すぐ寂しかつたよ。智也に会いたくて仕方なかつた。いつも日本の方角ばかり見ていたの。勉強しに行つたけど言葉とか伝わらない時とかあって辛かつたりもして。あ、でも辛い思い出だけでもないから。行つたことで後悔はしてないよ。すぐ勉強になつたから。

……でも智也に会えなくてすぐ寂しかつた

言つて響は智也を見つめていた。訴えるような寂しそうな響の眼差し。いとしさが込み上げてくる。今すぐ抱きしめて好きだと言つたかった。

「俺も響に会えなくて寂しかつた」

自分でも驚くほど素直に言葉が出た。智也は照れたよつて、甘いこちなく笑つた。

「ずっと側にいて欲しいんだ」

言つたかったことを口にして智也は顔が真つ赤になるほど恥ずかしかつた。こそばゆいような。切ないような。

「あたしも智也の側にいたい……。でも」

響の声が震えていた。

「響？」

「もう、いかないと」

響は静かに立ち上がった。智也は急に不安になる。

「響！」

叫んだ、つもりだった。声が出ない。響の姿が遠ざかって行く。智也は不安になつて必死で手を伸ばそうとした。けれども体は金縛りにあつたように動かない。智也の手が響に『届くことはなかつた。もう、一度と』

「響！」

自分自身の声で智也は目を覚ました。起き上ると胸が高鳴つていた。額に汗が浮かんでいる。カーテンの隙間からは眩しい朝の光が差し込んでいた。閉じられたカーテン。窓も開いてない。

「夢？」

だつた。響が遠くへ行つてしまつ夢。胸が押しつぶされそうになつた。不安でたまらなくなる。

「響……早く帰つて来て」

響が帰つてくるのは明日だ。智也は不安を押し殺すように呟いた。今度こそ告白しよう。智也は強く想つた。

「風邪治つたんだな」

昼休み食堂で柳にくわした。

「俺のおかげだな」

そう言つと柳はにやつと笑う。

「……何がいいんだ」

なげやりに智也はため息混じりに言つ。

「A定食！」

即答で柳は満面の笑みを浮かべている。智也は渋々ポケットから

財布を取り出すと自分と柳の分の食券を買つた。差し入れの分なんか、響に風邪を引いたことをバラされないための口止め料なのか。悩むところだ。

『えー新たに情報が入りました。昨日消息を絶つたカナダ発六三〇一便と見られる飛行機の一部が海上で発見された模様です』
ふいに、食堂のテレビの音が智也の耳に入った。智也はテレビの方を振り返る。ニュース原稿を読み上げるキャスターの声に釘付けになつた。

「このニュース……」

「お前寝込んでたから知らないか。カナダ発の飛行機が消息不明になつたつて。昨日からずっとこのニュースで持ちきりだぜ。やっぱり墜落してたのか。嫌だな」

同じようにテレビ画面を見つめながら柳は言つた。心臓が痛いくらいにドキドキする。嫌な予感。昨夜の夢が脳裏によぎる。

「響は……」

口の中が急激に乾いていく。

「響が乗る飛行機は明日の便だ。あれに乗っているわけないだろ? だけど事故のせいで帰国遅れるかもな」

そうだ、響があの飛行機に乗っているわけがない。

「そうだな」

智也は不安を押し殺した。

寮に戻つてもテレビのニュースは墜落事故の報道一色だった。無理もない。乗客のほとんどは観光目的の日本人だつた。乗客乗員共に生存は絶望視されている。どのチャンネルも関連のニュースばかりで智也はテレビを消した。

響が乗っているはずがないとわかっているのに胸がざわめく。

今朝の夢のせいだ。

テレビを消した部屋は静まり返つた。置いてあつた時計の秒針だ

けが部屋の中で響く。落ち着かない。畳の上に転がって智也は膝を抱えた。響の姿を見るまでは安心できない。

智也は不安でたまらなかつた。目を閉じる。

遠くから廊下を走つてくる音が聞こえた。徐々に部屋に近づいてくる。

「智也!」

ノックもせずに荒々しく開かれたドア。入つてきたのは柳だつた。荒々しく入り込んでくる。智也は起き上がりつた。

「なんだよ、柳。もう少し静かに……」

柳は智也のところまで来ると両肩を掴んだ。柳は今まで見たことないくらい真剣な顔をしていた。

「智也、落ち着いて聞け」

いつもと違う切迫した声。

「墜落した飛行機に響が乗つていたかもしれない」

「え?」

一瞬にして血の気が引いた。耳鳴りがして柳の声も時計の秒針も聞こえなくなる。何を言われたのか理解出来ないのに、理解していく。目の前が真っ暗になつた。

どぐどくと心臓が高鳴つている。

嘘だと言つたかった。それなのに智也の口からは何も言葉は出でこなかつた。あれは夢だったのに。響がいなくなる? これは悪い夢だ。何度も繰り返した。

平衡感覚が揺らぐ。喋り続けている柳の唇を智也は放心状態で見つめていた。耳鳴りのせいで何も聞こえてはいなかつた。

どうして俺はここにいるのだろう?

智也はぼんやりと思った。黒いスーツを着て智也は飾られた響の写真を見つめていた。黒い枠の中で笑う響の顔。

あれからどうこう風に時間が経つたのかよく覚えていない。断片

的な記憶の羅列。

響は墜落した飛行機に乗っていた。留学していたホームステイ先の家族から連絡が来てそれが発覚した。響は日本の家族や友達を驚かせたくて三日早い飛行機に乗った。

それが墜落した飛行機だつた。

「何であいつ……ばかなことして」

同じように黒いスーツを着た柳が智也の隣にいた。感情をあらわにして涙を流す柳と裏腹に智也は涙も出なかつた。響が死んだという実感すら持てず、感覚が麻痺していた。泣けてしまった方がよっぽど楽だったのか？　いや、泣けないのは単に共に過ごした年月の違いなのかもしない。

たつた数ヶ月共に過ごした俺と、幼い頃から一緒だつた柳と。

「俺の、誕生日だつた」

智也はずつと思つていたことを口にした。

「響が前に約束してくれた。一緒に俺の誕生日を祝つてくれるつて。だから響は三日も早い飛行機に乗つて……」

泣くことも出来ないまま。智也は感情のない声で呟いた。

俺のせいだ。俺が、俺の誕生日なんてどうでも良かつたのに。悔やんでも悔やみきれない思いがよぎる。あの夢を見たとき響は遠くへ逝つてしまつていたのだ。

「お前のせいじゃない。誰のせいでもない。だから自分を責めるな」掠れた声で柳は言つて智也を睨みつけた。

「ごめん」

何に対しても謝つているのか。智也にもわからなかつた。

祭壇に置かれていたのは響の写真だけで遺品も遺体もない。こんな奇妙な葬式があるのだろうか？　斎場に集まつた響の親戚や友人たちも戸惑いは隠せない様子だつた。泣いている人間。それでもなく付き合いでのこの場に出席しているだけの人間。はじめて見る響の両親の姿。響は母親似なのだと妙に納得している自分がいる。

俺は一体どうしてここにいる？

その疑問を何度も繰り返していた。

いつしか新緑の眩しい季節になつていた。

響がいなくなつてから三ヶ月。長かったのか短かったのか。悲しみは癒えないまま、気づけば普通の生活に戻つていた。何気ない日常がそこに在る。毎日仕事をして。時には職場の人たちと呑みに行つて。休みの日には友達とドライブをした。

あなたのいなくなる前と同じように世界は廻つている。テレビのニュースを見れば人の死は当たり前のように報道されている。田を背けるようにテレビのチャンネルを変えた。

柳も以前と同じように笑つている。

いや、違う。時々誰もいないところで辛そうにしているのを見かけた。しかし智也は見て見ぬフリをした。一人きりになるのが辛かつた。お互いに距離を置くようになつっていた。前みたいに喋ることが出来なくて。

もう、戻れない。

なのに、同じ日常を演じている。

時が経てば悲しみは癒される。

いつしかあなたを失つた悲しみも忘れてしまうのだろうか？

「忘れる？」

このまま響のことを忘れてしまうのだろうか？ 智也は愕然とした。

突然涙が溢れ出す。忘れていいわけがない。響がいなくなつてから智也ははじめて泣いた。止まらなかつた。あとからあとから涙がこぼれる。自分のせいで響が死んだのにそれを忘れて生きていくっていいわけがない。癒されることで忘れてしちゃうくらいなら癒されなくたつて構わない。ずっと後悔していた。

忘れるくらいなら悲しいまま生きていつた方がいい。

「生きていく？」

響のいな世界で？

とたんに行先が見えなかつた。真つ暗な世界が智也を包んでいた。あたなのいな世界で生きていくことに意味なんてない。

たつた独り智也は狭い部屋で泣いた。声も上げずに涙を流した。この感情を何といつていいのか見当もつかない。これが絶望だとうのだろうか？

涙で濡れた智也の視線の先にロープが置かれていた。仕事で使うのに買ったロープ。智也はロープを手に取つた。そのロープをじつと見つめる。

魔が差した。

どうでもよかつた。これ以上何も考えたくない。生きていいわけがない。自分が。

「思考なんて停止させてしまえばいい」

一本のロープを握り締めて、智也は頬りない踏み台に乗つていた。天井にロープをくくりつける。自分が何をしようとしているのかわからなかつた。

田の前に吊るされたロープを見つめる。不思議と恐怖は感じなかつた。きっと感情が麻痺していたからだ。そうでなければこんなことをしようとは思わない。あなたを失つたことを忘れて癒されたつて何の意味もない。

あなたのもとにいきたかつた。

願つたのはただそれだけだつた。

智也はロープを首にかけた。

「響」

カタン。

咳いて智也は台から足を踏み外した。
とたんに襲ってきたのは死の恐怖。

智也は足搔く。

手を伸ばす。

その手を掴むものは誰もいない。

意識は薄れて逝く。

たつた独り暗闇へ還る。

誰に看取られることなく。

募つたものは何だったのか？

それすら焼き消して。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2013d/>

あなた

2010年10月8日13時28分発行